

元オリンピック女子バスケットボール選手の引退とキャリアトランジション

—ライフラインを用いた質的研究—

Former Women Basketball Olympians Career Transition and Retirement

—A Case Study of Qualitative Research using Life line—

1K10C364-8 藤生 喜代美

主査 原田宗彦 先生

副査 倉石平 先生

【背景】

Jリーグやbjリーグなどプロスポーツの発展が進んでいる今日、チーム形態や選手の雇用形態も変化してきた。日本トップリーグ連携機構の調査（2012）によると、機構所属リーグの選手 4021 人中 43%が社員契約で、残りの 57%は嘱託やプロとしてチームに所属していることが明らかになった。また、引退後継続して企業に雇用された人数は、2012 年度の引退者 651 人のうち 26%に留まっていた。この結果は、引退後不安定な状態にある選手の増加を意味しており、実際に困難な状況に直面する問題も深刻化している（吉田、2007）。その問題に対処すべく、キャリアサポートの体制が整いつつある。しかし、それだけで本当に引退後のアスリートによる社会への不適応問題は解決されるのであろうか。

【目的】

本研究の目的は、元トップアスリートの引退とキャリアトランジションをインタビュー調査を通して明らかにすることとする。事例研究から元トップアスリートがどのように引退を体験し現在に至っているのか、心理的側面から質的研究を行い、現役選手に対して、キャリアトランジションへの情報不足を補足する資料になるよう本研究を位置づけたい。

【方法】

元オリンピック女子バスケットボール選手 5 名の、キャリアトランジションについて半構造化インタビュー調査を行った。競技開始時から現在までのライフラインを記述してもらいその結果に即してインタビューを行った。インタビューの時間は、一人当たり 2 時間程度を要し、対象者の許可を得てインタビューを録音した。分析方法としてライフストーリーインタビューを参考にした。一人ひとりのライフラインを図で示し、競技期、引退期、再適応期について事例提示を行い、その後討議を行った。5 名の事例提示を行った後、引退の契機とキャリアトランジションの影響要因 6 つに着目して考察を試みた。

【結果】

6 つの視点に着目し、以下のような結果を得た。

①引退の予期は全員があった。②引退の契機は自発的要因だけのものはいなかった。③将来の展望があった者、なかった者に分かれたが、その結果と引退後の不適応と

に相関はなかった。④模索期間を全員が意識的、主体的に過ごし「アスリートではない自分」には何ができるのか模索していた。⑤役割受容については、模索中の 1 名を除いては「アスリートではない自分」の新しい目標を持っていたことから、受容がなされていると考えられる。⑥ソーシャルサポート（周囲の人達の支え）についても、全員がサポートを受けていた。どんな人からどのようなサポートがあったかについては、個人個人異なっていた。（表 1 参照）

【考察】

本研究の対象者は、模索期を意識的に設け、主体的に過ごしていた。模索期において、引退後の人生で自分が何に取り組んでいくのかを模索し、現在の新しい目標に向かって歩んでいることが伺えた。アスリートが、模索期間を有効的に過ごすことで、「アスリートではない自分」の目標を見つけ、その後の人生に移行していくことができると考えられる。模索期は、アスリートのキャリアトランジションにとって、不適応と称される時間ではなく、必要不可欠な期間だと言える。豊田（2000）は、引退期の問題の取り組み方が、その後の生活に影響すると同時に、そこに遡る現役期の過ごし方が、その後の引退期の在り方を規定すると述べている。

アスリートは遅かれ早かれ必ず引退を迎える。引退後次のキャリアに進む際、いかに引退期を経験し、模索期間を充実して過ごすことができるかによって、セカンドキャリアにおける「アスリートではない自分」の在り方が異なってくると言える。アスリートにとって、模索期間の重要性を確認できたと考えられる。

表 1 引退の契機とキャリアトランジションの影響要因

対象	引退 予期	引退契機	将来 展望	模索 期間	役割 受容	人的 支援
A	○	怪我 目標達成	×	○	○	○
B	○	バーンアウト	○	○	○	○
C	○	監督交代	×	○	○	○
D	○	環境変化 怪我	○	△	○	○
E	○	廃部	×	○	△	○